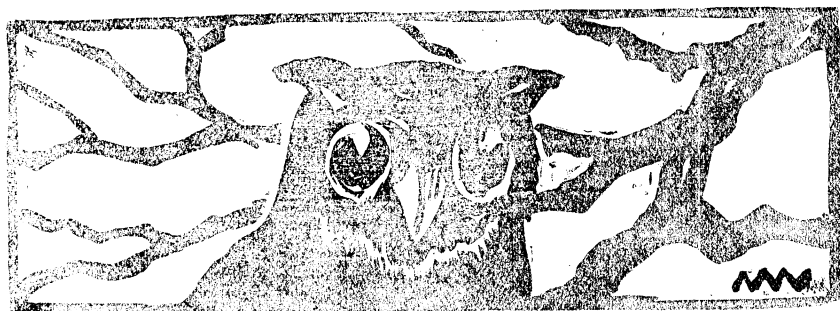




小さな廢墟

田 山 花 袋

『何うも此頃は何も彼も問題にならなくつて困る』

私はかう笑ひながら言ふと、若い友達はまだ始まつたといふやうな顔をして、『さうですか、僕なんかまた問題になりすぎて困るんですが……』

何も彼も、そんなこと下らないと思ふことまでも、問題になつて仕方がないんですが』

『さうかね』

『貴方はまた問題になるのにわざとしないで放つて置くといふやうな處がありやしませんか』

『そんなことはない積りだけんど……』

『面倒だから放つて置く。考へずに置く。さういふんぢやないでせうけれど、始めから、問題にならないつて言んではないんでせう。幾度もさうい

ふ問題に邂逅して、もうそんなことはわかつてゐるつて言ふんでせうが、そのわかつてゐるといふことを言はずに、先を考へて見なくつちやならないんではないでせうか。少くともトルストイがあの年まで深い考察と恐ろしい煩悶とに耽つたやうに——。』

『しかし、君、トルストイのあの晩年の悲劇は、君達の想像してゐるやうに、問題に逢着してあの年まで煩悶を捨てなかつた爲めに起つたことだらうか。さういふ風な性格も、あの人にはあつたには相違ないが、もつと他に理由があつたんではないかしらん。僕等もまだあの年には達しないから、よくはわからないけれど、兎に角、人間にはある境からある境、ある知識からある知識と言つたやうに、物が開けて行つて、問題にしないといふことが、大に問題にしてゐるといふことにもなつて行く時があるもんだからね』

若い友達は考へて、『それはさうでせう。問題にする方法がちがつて來ることはあるでせう。しかし問題にならないといふことは絶対にないと思ひますがね』

『絶対に？』

『え』

『絶対にはちよつと考へ物だ。何故なら、いくら問題にしたつて何うすることも出來ないものがこの宇宙の底に横つてゐる。その底に横つてゐるものに突當ると、絶対といふことは言へなくなる。』

『そこがいけないんぢやないですか。突當るものがあると思ふのがいけないんぢやないですか？』
『でも突當るんだから仕方がない。』

『その突當るといふのは、何ういふ風にです？もつと具象的に伺はないと、よくわかりませんけれど：……。例へば、貴方のよくおつしやる年齢のやうなもんですか？』

『年齢ばかりではない。凡てがさうです。物に對して凡て、殆ど總て。體も、精神も、體と精神とから起つて來る性慾も何も彼も……』

『ちよつとわかりませんな』

私は考へた。沈黙は續いた。家庭問題だの婦人問題だの社會問題だのが、到る處に堆積されてある。しかし、さういふものは大きな力の巴渦の中に浮んだり、沈んだりして行く泡沫のやうなものだ。すぐ消えて行つて了ふ。そしてまた新しい泡沫が浮んで來る。

『では思想は？』

若い友達はかう反問した。

『思想？ ある大きな力からある傾向やら發現やらを抽象したのが思想として考へて見て、大きな思想は大きな力と一致したやうなものですな』

『では、かなり、漠としたもんですな』

『さうですね。或は思想なんて言ふものは、第一義的には存在しないかも知れませんが。この世界の中心を流れてゐるのは、思想ではなくつて力でせうね。問題ではなくつて事實でせうね』

こんなことを話したのは、昨日だか一昨日だか、それとも十年も前のことだかわからないやうな氣が

して私は机の前にひとりぼつねんとして座つてゐた。梅雨が暗くあたりを襲つて、深い緑が頭を壓し附けるやうに蔽ひかぶさつて來た。雨がサツと降つて通つた。

もう何も彼も澤山だ。かう私は思つた。餘りに私には種々な誘惑やら種々な經驗やら種々な追憶やらが餘り過ぎた。『何故、俺はかうだらう。何故俺はかう深く物を思ひすぎるのだらう。何故また俺はかう種々なことを知りたがるだらう。知らずに居られないだらう。本當に、本當に、もう澤山だ』

……種々な顔が私の眼の前を通る。丸い顔、細長い顔、切れの好い眼を持つた顔、額の大きな顔。つゞいて、此間田舎に行つた時のことが思ひ出された。深い藪の中に私は入つて行つた。雜草だの竹だのが一杯に茂つた藪だ。蝦蟇だの腹の赤い守宮だのがそこにゐた。藪の中にな、黒い水が百年も千年も淀んでたまつてゐるやうに物凄く見えてゐた。

かと思ふと、私はこんなことを言つてゐた。『ぢや、此の室だね。君がその女と深い戀に落ちたのは？ この壁、この根太、この柱、この古い竹と松の墨繪のある板戸、これは皆なその時と同じなのだね。ふむ、さうかえ、こゝにあつたのかえ？ その圍爐裡が……。その圍爐裡の此方と彼方とに坐つて、お互に涙をこぼしたんだね。火箸をいぢりながら低頭いた女の眼から涙がほろ／＼灰の中に落ちたつて言ふんだね。そしてその女の競争者の男の子供を今度君は貰はうつて言ふんだね。ふむ。そして女は何うしたんだえ？ 死んだ？ 二十年も前に？ ぢや、その今度の貰はうといふ子供の親も、矢張君と同じく失戀者だつたんだね。關係のあつた失戀者だつたんだね』

私は續いて言つた。『完全な^{あと}址だね。問題に問題が起り、煩悶に煩悶が重り、歡樂に歡樂が積まれた址

だね。ふむ、あの老人、あの老人にもさういふ話があつたのかね。さうかね、今ぢやそんなことは誰も知つてゐるものはないが、その二階に女を毎夜つれて來たことなどがあるのか？」かう言つて、私は二階に上つて見た。暗い閉切つた二階には、何十年の塵埃が溜つて、古い板戸が右往左往に亂れてゐた。西の高窓から微かに光線はさしてゐるけれど、それは微かに二階の入口のところを見せてゐるばかりで、あとはちよつと入つて來てはわからないほど暗かつた。

私は草履を踏み立てるやうにして、靜かにその暗黒の中を彼方此方と歩いた。やがて落ちた壁や黒く煤けた羽目や其處此處に置いてある養蠶の籠などが見え出して來た。古い佛像なども置いてあつた。

そこから下りて來て、私は言つた。『この動かすべからざるある物の中に、萬事萬物の陷没して行く形は悲惨なものだね。いくら大きな問題でもそのある物の中には消えて亡くなつて行つて了ふんだからね。さう言へば君、今度の歐洲の戦争だつてさうだ。あれほどの大問題はないだらう。歴史の上にも澤山は見ることの出来ないほどの大問題がそこに巴渦を卷いてゐるだらう。また個人の上から言ふと、あらゆる悲哀、あらゆる涙、あらゆる夫妻親子の離別、さういふものが無數に日毎に行はれ且つ消費されて行つてゐることであらう。しかし、山の中にはそんなことを知らずに生きてゐる人間がある。何處で風が吹くと言つたやうに痛痒を感じずに生きてゐる人間もある。新聞記者は平氣で戦死者の人数を數へ立ててゐる。つまり一方大事件でありながら、一方また風が吹いたり雨が降つたりする位の小さな事件なのだ。何も彼も問題にならないぢやないか』

『私の隣の兵隊さんの嬬は、彈丸がドンと來りや若後家ぢや』私は掩體の中の悲慘な光景を眼の前に見た。兵隊達は一時間ほど前に圓匙で一生懸命に堀つた二尺に滿たない穴の中に蹲踞つて、ある者は腹這ひに、或者は仰向けに、ある者は折敷きの形を取つて、一心に向ふを見てゐた。丘のすぐ傍に、敵が矢張同じやうにして散兵線を引いて蹲踞つてゐた。頭の上を砲弾はグン／＼と鳴つて通つて行つた。炸烟が炸烟につゞいた。後の松山は丸で砲烟で白くなつてゐる。そこに司令部がある筈だ。

小銃の音は豆を煎るやうに、機關銃の音は煤拂でもするやうに……。ふと氣が附くと、そこにゐるのはロシア兵で、何だかそれがレンベルヒの爭奪戰のやうに思はれる。

かと思ふと、楊の茂つたある谷からある谷へとひとり歩いて行く私の姿が見えた。私は制帽を冠つて、ケイドルをつけて、水筒を肩からかけてゐる。丘を蔽つた高梁が縦横に折倒されて、そこに電信隊のかけた電信の線がつゞいてゐる。あたりには人一人ゐない。暑い日影に照つた雲が靜かに谷の上を通つて行つた。

『あ、君もあの谷を知つてゐますか』

『え、あそこには五日ほどゐましたから、よく知つてます。あそこの谷はよく通つたものです。涼しい處でした。あつちで、あんなにすゞしいところはない位でした。好い水がありましたね』

十年も後になつて、私はあるところである男とさういふ話をした。私達は年こそ違ふが、同じ路を歩いたのだ。そしてその男は私の愛した女を愛して、二年ほど關係して、そして別れた。私もその女に別れてから、その男とその女の話をした。

『本當に、あそこの水は好かつた』

『でも、あの戦争では、もうとても駄目だと思ひましたね。よく生き残つたもんです。私の隊では半分以上死にましたから』

『ひどい戦だつた』

こんな話もした。

私は言つた。『址あしになつて行く時の悲哀は忘られないね。心がかう底の底に落ちて行くやうな心持があるね。私達はそれに堪へて來た。一度、二度、三度……少くともそれだけはある。寢ても眠られない。物を食つても味がしない。時々赫となつて、身も世もあらなくなる。涙が夕立のやうに頬を濡す、心を浸す、體を浸す。そして、ばつと夕日が當る。虹に似た美しい犠牲の念が熾に起る。そしてこの美しい犠牲の念に欺かれて、段々址になつて行くんだね』

『本當だね。有から無になつて行く境界線は面白い物だね』

一緒に歩いてゐる友達は言つた。

そこは小さな廢墟であつた。或は廢墟と言ふほどのものではないかも知れなかつた。それほど古いものでもなかつた。しかし奈良の廢墟とか、フルージの廢墟とか言ふやうに古くないところが、却つて私達の心を惹いた。有から無になりかけてゐる形が私に人間の變遷と心理とをありありと見せた。

そこには大きな河に近く、曾つて一つの停車場があつた。そこの鐵橋の工事が出來ないので、汽車は

三年も四年も其處に終端驛を置いてゐた。従つて其近所を往來する旅客は、そこから下りて川を渡つて行かなければならなかつた。停車場の前には、いろ／＼な人達が來て住んだ。休憩所も出來れば、飲食店も出來た。驛長や助役の住む社宅なども出來た。ある休憩所からは、青田が一面に見わたされて、夜は蛙が鳴き螢が飛んだ。後には白粉をつけた女が大勢來て、賑かに騒いてゐる夜などもあつた。

停車場を出て、さういふ家の前を通つて、綺麗に青草の生えてゐる土手を上ると、大きな河が溶々として平野の中を流れてゐるのが一目に見わたされた。渡頭はそこから二三町上流にあつて、その向ふにある町とある村とを連絡した舟橋がかゝつてゐた。渡頭まで行く間の細い路には、夏の日の草いされの中に紅い撫子などが咲いてゐた。桑畑の中では、白い手拭を被つた田舎娘がせつせと桑を籠につんでゐたりした。

それが四五年して、鐵橋が出來て、停車場が河向の別なところに移つて行つてから、一度開きかけた土地は、再びもとの荒蕪地になつて行つた。私は青田に面したその休憩所の屋根が無残に剝ぎ取られて柱ばかりになつてさびしく立つてゐたり、停車場が廢人のやうになつて何時までも何時までも其處に残つてゐたりするのを汽車の中から見て通つた。尠くとも二三年はその停車場は風雨に吹き曝されて残つてゐた。しかし、それも段々なくなつて行つた。ある時、通つた時には、址に草が一面に茂つて、礎ばかりその中に残つてゐるのを見た。

『とう／＼あそこも、本物の廢墟ルイになつて了つたね』

私はかう友達に言つた。

『同じことだね。ローマの廢墟だつて、奈良だつて、フルージだつて、皆なあゝいふ風にして廢墟になつて行つたんだね』

友達もかう言つて合せた。

私の眼には、奈良の大極殿の址だの、都府樓の址の礎などが歴々と浮んで見えた。私はその後も度々そこを汽車で掠めて通つて行つた。雨の降り頻る中に百姓が笠をかぶつて通つて行つたりした。そこを過ぎると、汽車は長い鐵橋へとかゝつて行つた。

此間、田舎に行つた時、私は友達とわざわざ其處へ出かけて行つて見た。若葉の緑の美しい日で、野には一面にけんげなどが咲いてゐた。私達は靜かに歩いて行つた。

廢墟に似たやうな私の心だ……。

『それでも三年位、ここに停車場があつたね？』

『三年ときかないよ。四年位あたつたらう』

『その間に、いろんなことがあつたらうね。ラブの一つや二つはあつたらうね』

『君は知らなかつたかな。話したと思つたがな。話さなかつたかな。其處の休憩茶屋の女が改札か何かに夢中になつて、男も惚れて、川から情死しかけたことがあつたアね』

『そんなことがあつたかね』

『それが、男が僕の町のもんでね。何でもお袋と二人でゐる奴でね。お袋が大騒ぎをしたことがあつたよ』

『何方も助かつたのかえ』

『何でも引揚げた時には、女は感じがなかつたさうだつたけれど、人工呼吸か何かしたら、呼吸をふき返したつていふ話だつた』

『ふむ……。そんな話、すこしも知らなかつた。一體、いつ時分のことだえ？』

『鐵橋で、大勢人夫が入つてゐる時分のことだよ』友達は歩きながら、『何でも、人夫頭か何かで、女にあつくなつてゐる奴があつて、金を出して自分のものにしやうとしたんだよ。何でもそんな話だつた。』
『さうかねえ、面白いねえ。さういふことが、他にもいくらかあつたらうね。誰も知らずにゐるけれど……』

『それはあつたらうよ』

『廢墟も、さうなつて來ると、面白ね。矢張人生だね』

停車場の址の向ふの方には、赤い煉瓦の堆積が雨に打たれ風に曝されてそこら一面に散ばつてゐるのが見えた。私達は太古の址あとをさぐる旅客のやうな心持を抱いて、礎いしの残つてゐる跡などを拾つて歩いた。
『この赤い煉瓦は何だねえ。矢張、鐵道の方でつかつたのかね？』

『いや、それは、こゝに停車場が出来る前からあるんだよ。何でも瓦か何か焼いたあとだよ。それにも面白い話があるんだよ。』其方の方へ歩きながら、『何でもこの先の在の男だね。事業熱にかされた奴があつてね。何でもかなりの財産家だつたさうだが、いろいろなことをやつて失敗して、最後に此處で瓦を焼き始めたんだね。始めは大分によかつたつていふことだつたよ。瓦の他に例の井戸端などにつか

ふ赤太い土管なども焼き出したんだがね。ちと仕かけが大きすぎたんで、二年ほどで、すっかり駄目になつて了つたんでね。今ぢや、それをやつてゐた男も死んで、あとは滅茶滅茶になつて了つたといふとだ』

『ふむ』私は思はず立留つた。『矢張、悲劇のあとだね』

そこらに散ばつてゐる址の中には、成ほど窯のあとだと點頭かれるやうなものも残つてゐた。赤い煉瓦は色が褪せて、草だの蔓だのが一杯に這ひかゝつてゐた。その下の溝の水は黒く汚く淀んで、流れるともなくレールの向ふの田の中に流れて行つてゐた。

『すべて址だね』

私はかう言つて溜息を吐いた。

私達はそこから昔休憩所の店の並んでゐた跡を通つて、車夫が車を並べて客待をしてゐたところを通つて、一直線に土手の上へと上つて行つた。春の水のたふたぶとした大河は私達の前に展けた。

『でも、人事ばかりではないね。天然にも變遷があるね。汽車が此處でとまる時分には、向ふには桑畑があつたり何かしたんだけど、それも三四年前の洪水ですつかりなくなつて了つたね。渡頭の杉もすつかり流されてなくなつて了つた。ちよつと、あの時分の様子とは、感じが丸で違ふね』

私達はかう話し合つた。

麥の黄く熟した丘が彼方に見えた。それを見て私は思ひ出した。『あゝ何年前だらう。丁度あのやうな

丘だつた。長く靡いて麥が黄くなつてゐる丘だつた」私はかなり遠い昔を繰返した。

と、その時の佗しい悲しい辛い心持が再び新しく私に蘇つて來た。重く壓せられるやうな、ゐても立つてもゐられないやうな、ある力に引摺られてじつとしてはゐられないやうな心……。

汽車は全速力で走つてゐた。

朝であつた。曇つたといふよりは、まだすっかり明け切らないといふやうな朝だつた。私は悲しい夢からわびしい現實へと目覺めて來てゐた。丁度その時黄く熟した麥の丘のやうなことを汽車は通つてゐた。

『これで一生の別れ』

かう思ふと同時に、嫉妬と憎惡との念が燃えるやうに起つた。何うして復仇せずには置かれやうと思つた。しかし心はすぐ沈んで行つた。『あの女とさへ別れて了つたら、自分は何うするんだらう。何う生きて行くんだらう。ひとりでさびしくこの辛い世の中が送つて行かれやうか。自分はあれほど心を注いだのに……。あの女の體と心の中にこの自身があれほど深く入つて呼吸してゐるのに……。それをあのやうにして……。あんな一時のはづみ見たいなこと……。』

麥の黄い丘は、丘へとつゞいて行つた。私はじつと唯それに見入つた。自分の心が體が苦惱が無關心な自然の中に深くにじみ込んで行くやうな氣がした。

『ぢや、その積でゐろ！』

『ゐますとも……』

『忘れるな』

『自分で言つたことを忘れることはありませんから、大丈夫です』

私は黙つた。女も下唇を咬んだ。忘れもしない、それは遠い遠い田舎の小さな停車場の前の旅館の間であつた。静かに水田を見わたすやうなところで、田の畔には揚柳が姦々と青く見渡された。その柳の縁を私は唯凝と見詰めた。

その小さな田舎の停車場、それが私の長い一生に何れほど深く刻み込まれてあることだらう。肥つた驛長の顔、若い改札の男の顔、其處に待合せてゐた客の顔、停車場の向ふにある井戸つるべ、赤く毒々しく咲いてゐる西洋の草花——私達はその間を仇敵のやうな風をして、別々の車室へと乗り込んで了つた。

汽車は唯走つた。幾つかの停車場をも素通にして……。

今でも黄い麥の丘はある。汽車は走つてゐる。しかし女は？ あゝ燃立たぬ心は？

『矢張、址だ』

かう私は思つた。

人間の心理に横つてゐる址と、自然の中に残つてゐる址と。後者は二千年経つても、三千年経つてもその址はそれと認めることが出来るが、前者はすつかりあとも形もなく消えて行つて了ふ。否、消えて行つて了ふだらうか？ 否、否、矢張それは永久に人間の心の中に、廢墟として残つてつゞいて行くに相違なう。

イブセンの提供した問題は？ ショウの提供した問題は？ さういふものは消えて行つて了つても、址だけは、この址だけは……。

『兎に角、確實につかむといふことが必要ですね』

かうある若い友達に言つた。

『つかむといふのは？』

『自己のものにするといふ意味です』

『他をですね』

『え、さうです』

『しかし、それは出来ることでせうか。他を確實につかむといふことは人間に出来ることでせうか』
『いくらも出来ると思ひますが——』

『では、君は完全に君の細君をつかみ得たと思ひますか？』

『え』

『子供も？』

『え』

『友人も』

『え……ある程度までは』

『しかし、私はさうは思ひません。絶対につかむことは出来ないものだと思つてゐます。細君も、子供も友人も乃至は戀人も、決してつかみ得るものだとは思つてゐません。』

『では、何うして、かうしてゐるんですか』

『私もこれまでつかむことに努力はして見た。一人一倍の努力はやつて見た積りです。しかし、曾つて一度だつてしつかりつかんだことがあつたでせうか。私は私です。妻は妻です。戀人は戀人です。子供は子供です。永久に平行線ではありませんか』

『そんなことはないと思ひます』

『しかし、私にはかう思ひます。この平行線が無數に平行してゐて、そしてその平行した形の上に起つて來る調和とか融合とか言ふことは認めます』

『それが一致すると思ふんですが——』

『一致する時が來るかも知れない。しかし、私には、私の半生の經驗ではさうは思はれません』

こんな話を何處かでした。それが何處であるか、自分の宅であるか、それとも何處か川に臨んだ室であるか、山を前にした室であるか、それを私は覚えてゐない。

半分あけた窓から涼しい風が入つて來る。その窓は竹で編んであつて、向ふに柿の廣い葉が見える。その葉の表に日が明るく照つてゐる。あるところは暗いが、あるところは明るい。

丁度心に似てゐる。またその心が曇つたり晴れたりする。私はじつと私の心を凝視した。

何故私の心はかうわびしい暗い影を帯びたり、明るい日影に照されたりするのだらう。何故細かい葉裏の線のやうな愁を帯びるのだらう。ある時は静かに、或る時は強く烈しく……。

ある聲は言つてゐる。『疲れた、ひどくつかれた！』かと思ふと、ある聲は言つてゐる。『お前のやうに強い肺を持つたものはない。大きく息吐け！』と。

ある夜は、男の兒を伴れて、私は野の方へ行つた。

川があつた。そこには白い花が咲いてゐる。卯の花だ。私達は川に添つて、橋を越えて遠い遠いところまで行つた。

『螢！ 螢！』

かう男の兒は言つて、それを追つて走つた。螢はふわりふわりと光つたり消えたりして向ふの方で飛んで行く。

『あ、あんなところに行つちやつた！』

男の兒はかう失望したやうに言ふ。

川のあるところは瀬を成して流れてゐた。音が凄しく闇を破つてきこえてゐる。私は且つ思ひ且つ歩いた。

時といふことは立體ではなくつて、平面的だといふことを、氣が附いて見ると、私は考へてゐた。螢がまた一つすと闇を掠めて飛んで行つた。

私は其頃或心に觸れてゐた。ある心のあらはれは私を堪へ難くした。しかしそのあらはれは、別に無

理なものでもなければ不條理なものでもなかつた。當然起るべきことが起つて來たにとゞまつてゐた。それでゐて、何故かう私の心を支配するだらう。知るといふことを私は考へずには居られなかつた。

螢がまた一つ飛んだ。

今度は、男の兒は巧にそれを捉へて喜んだ。

『父さん、螢、螢』

私はそれを子供の袂に入れてやつた。そして家の方へ歸つて來た。

親と子との關係、妻と夫との關係、社會と個人との關係——さういふ問題が到るところにある。到るところで衝突して、そして平地に波瀾を捲き起してゐる。

私は前に毘といふことを考へた。人間は何うすることも出来ないものだと思つた。不思議にも、今でもそれは眞理の一面ではあると思ふけれど、さう言ふ風に考へずに、もつと大きな調和が其處に存在してゐるやうに思はれ出して來た。私は私の通つて來た家庭生活などを考へて見た。

『家庭の争ひほど愚なものはない。そして人の精神を亡すものはない』かう私はある友達に言つたことと思ひ出した。子供は親の壓迫に苦むが、それは一面成熟しない子供に對する親の保護であるといふことなどは、親が亡くなつて了はなければ、完全に子供には理解が出来ないものである。何んなに仲のわるい嫁と姑との仲でも、姑の死んで行くのを見て單に重荷が下りたとかばかり考へるやうなもの人間にはないのである。唯、家庭の辛さは、毎日毎夜、同じ顔を突合してゐる辛さである。つまり『ありのす

さび』の辛さである。

私は人の子となり、人の夫となり、人の親となつて來たことを繰返した。私は私の子供の中に私を見た。完全な私を見た。子供の時分には見えなかつたわからなかつた自分を、自分の子供に發見した。従つて人の子としての真相は、人の親となつて見なければわからず、人の夫としての真相は、人の舅となつて見なければわからず、人の親としての真相は、人の祖父母となつて見なければわからないものだといふことを考へた。従つて人間は一生の中に二度同じ生活を繰返すものであるといふことが言へると思ふ。そしてその最初の一度は主觀的、無意識的の生活で、二度目は客觀的、意識的、觀照的の生活であらうと思ふ。前のは鏡も何も持たない生活である。後のは後に反射鏡（しやうきやう）を持つた生活である。

私の經驗では、鏡も何も持たない生活には、常に底に恐怖が伴つてゐた。不可解である。不可思議である。何ういふことが前から起つて來て、倏忽にして身を滅して行くかも知れないといふ不安がつねにつき纏つてゐる。不慮の災害が常に問題になる。自分で自分の行末がわからなくなる。従つて家庭にも疑問が起り、生活にも疑問が起り、社會對個人の關係にも疑問が起り、自と他との交渉にも疑問が起り、これを大にしては、自己の根本と自然の根本との連接について盛に疑問が起つて來る。

ヨオロツバの作家の書いた問題小説、問題劇、あゝいふものの痛切に頭に響いて來るのは、さういふ疑惑に満ちた生活に、ある快い解決或は答を與へるからである。マクダヤ、フオケラートや、オスワルドや、さういふものはすべてさうである。イブセンの戯曲、ストリンドベルヒの戯曲、ビョルンソンの戯曲、すべてさういふ形と傾向とを持つてゐる。皆な反射鏡を持たないために、真相がより大きく見

えたり、より恐ろしく見えたり、より美しく見えたり、より醜く見えたりする形である。幻想、幻影、幻視などで満されてゐる。

Une de siecle といふ言葉の影響は一時ヨオロッパを風靡した。極端から極端へを行つた。つまり秤の上下動が烈しく凄しく動揺したのだ。ある警官は死刑執行後に、人殺の罪人の皮の一片を取つて置いてそれを乾してシガー入れにした。ある息子は父親の入れられてある牢屋の前を通つて、『あい、あそこは父親の行つてゐる學校だ』と言つた。ある王はある政治上の權利を棄てた條件の下に、それを保留して置いて、それを自分の國へ賣つて、パリで博奕を打つて借金をかへした。かういふ例は澤山にあつた。殆ど數へ切れないほどあつたと言つて好い。マックス、ノルダウなどといふ老人が心配したのも無理はない。しかし、かういふ風潮がどれだけ長く世にあつたであらうか。生存に適せる、乃至は生の進化に益あるものだけ残して、あとは皆な消えてなくなつて了つたではないか。さういふことをした青年は、皆な平凡な、普通の人間といくらもかはらない。かれ等が生効のないとして斥けた單純な平凡な生活に入つて、鼻を持つたり、餓鬼を拵へたり、お役所へつとめたり、毎日四時すぎに歸つて來て晩酌をやつたりしてゐるではないか。何も心配したことはない。眞に何も心配したことはない。

日本でも新しい女の中には、墮胎なんて言ふことは何でもない。ちよつと自分の指先の血を流したやうなものだ。それを咎める法律なんて無意味だといふやうなことを書く女があるといふことだ。これは私はその文を見たのではないから、果してさうであるか何うかは知らないが、兎に角そんなことは無論何でもないことである。取り立つて言ふほどのこともない位のものである。世の中ではいくらもそんな

ことは實行してゐる。そして法律などを待たずに、ちゃんと自然の制裁を受けてゐる。一體、*Fine de goal* が法律などを對照にして皮肉を言つたり、氣まぐれを言つたり、新しいことを發明しやうとばかり心がけたりしてゐるのはまた本當ではない。もつと先に行つて、自然の制裁あたりまで進んで、うんとぶつつかつて見るが好い。それでも私は猶繰返すことが出来る、『何も心配したものはない』と。

明治大正の世の中にも、随分個人として大きな問題に邂逅した人はある。新聞で見たのを覚えてゐるだけでもかなりある。人殺しをした人の遺族だとか、破廉耻罪に問はれた名士の遺族だとか、近い例が例の海軍問題の人達とか、社會からおし落された形になつては、随分大きな悲劇でもあり、大きな問題でもあり、好い問題小説の材料でもある。しかしそんなことは何でもないぢやないか。海軍中將の位置から一囚徒に落ちて行つたからとて、個人の存在といふことには何の増減も加へられてはゐないではないか。矢張同じ人間だ。今まで善人であつたものが急に惡人になつたといふわけでもない。法律のさめた罪さへ受けければ、矢張同じ人間でこの世の中に生きて行かれるのである。またその人自身の内部生命から言つても、獄中の一食一睡が、世間に榮えてゐた時分の一食一睡よりも、愉快で、のんきで、待遠であると言つたやうなところがある。何んな境遇に落されて行つても、人間の内部生命は一毫も變つて行くものではない。これから思ふと、死刑などいふことは、大切な人間の内部生命に卑屈な小さな制裁を加へたやうなもので、その制裁を加へたものゝ方が却つて身敗れ心傷くといふ形になるのである。その證據には、裁判官の陰氣なつまらない家庭生活を見るが好い。

また斷頭臺に上された人間も、平氣で首の周圍に繩をつけて貰ふが好い。丁度不慮の災難か、ベスト

か、コレラで死んで行く人のやうに……。何も恐るゝところはない。現に、我々は、さういふ意味に於ては、毎日どれだけの無数の生物を殺してゐるか知れないではないか。

……や、しかし、餘り昂奮しすぎた。また Groligne Sentimentalism など、言はれるとわるいから、此位にして置いて、今度は反射鏡を持つた第二度目の生活のことを少し言つて見やう。しかし斷つて置くが、この第二度目の生活といふものも、決して自分が肯定して言つてゐるといふ譯ではないといふことである。時には、この反射鏡が非常に邪魔になることがある。そんな無用なもののかき捨て、もう一度始めと同じやうな生活をしたと思ふことが度々ある。しかし情ないことには、この反射鏡が何うしても動かずについて来る。何處に行つても、野に行つても、山に行つても、歡樂の巷に行つても、……。

そしてこれが名譽とか聲名とか財産とかいふ第二義的のものなら、何うにでも出来るけれど、振り捨てるなり、かき捨てるなり自由に出来るけれど、何うもさういふ手輕なものでなくて、飽まで根本的であるのが一番困る。大きくなつた子供が目の前にゐて、私の無意識であつた時代を具象的に映じて見せて呉れる。私の缺點を見せて呉れる。私の罪惡を見せて呉れる。また若い時代、新しい時代といふものがあつて、私の困迷した惑溺した懊惱した時代をはつきりと再び復寫して、手に取るやうに見せて呉れる。そして、ある作家は、私にその反射鏡を取つて了へと勧める。またある批評家はそんな反射鏡に捉へられてゐるから駄目だと嘲ける。私の最初の生活の、また回轉して來ない以前の生活の末期あたりに振廻した武器を振りかざして、却つて私に反省を求めて来る。

しかしこの反射鏡を取れといふ注文は、天と地とをなくして了へといふほどそれほど無理な注文だ。

何故と言へば、それは私に私の持った、或は私のあつた生活をなくして了へといふことと同じであるからである。有を無にして了へといふのと同じであるからである。

で、私は仕方がなしに、この反射鏡があるために出来た世界をさういふ人達に説いてきかせた。詳しく説いてきかせた。反覆して説いてきかせた。しかし、多く要領を得たことがない。理屈ではわかつてゐても、氣分ではわかつてゐまい。ある人はそれを妥協の世界だといふ。ある人はそれを享樂の世界だといふ。またある人はそれをあきらめの世界だといふ。或は微温の世界、或は洒落の世界、或は老人の世界、或は敗北の世界、さういふ名がちよつと數へきれないほどある。そして髪うしろの白くなつたのだの、齒の崩落したのだの、皮膚の硬くなつたのだのを憐憫乃至嘲笑の材料にする。その癖、さういふ反射鏡がもうそろ／＼後うしろに出来かゝつてゐるのには氣がつかない。

しかしこの反射鏡が曇つてゐたり、半ば出来かけて壞れて了つたり、丸で出来ずに終つたりする人がないでもない。或はそんなものは俺は拵へないといふ人があるかも知れない。しかしさういふ人ほどこの反射鏡の出来るのが早いのでから面白い。聰明なれば聰明なほど、この反射鏡が早く出来て、そして玲瓏透徹した形を保つたのだから面白い。

この反射鏡の出来かゝつて来る時分が、人間は最も注意しなければならない時である。……しかし、こんなことをいくら言つたつて盡きない。唯、これが出来ると、問題などいふことが起つて来ないといふことだけは言つておく必要がある。

しかし、この反射鏡は、人間に、人間の一番最奥に横つてゐる死といふものをよく映して見せる。

或はそれを暗く物凄く見せたり、或は明るくはなやかに見せたりする。時には、人間をその境に一致させて、融合とか調和とかいふ境に伴れて行く。

其處に私がゐる。種々な私がある。薄い蒲團の上に寝て、まじりまじり大空の青いのを見てゐる私がゐる。母の背に負はれて、何も理由もないのに、いつまでも泣きじやくりをしてゐる私がゐる。風の音や、水の音に小さな耳をそばだてゝゐる私がゐる。唐人笛の音が日當りの向ふの田圃道を通つてゐる。それを私はきいてゐる。

それから暫くすると、筒袖姿でヤンマや蟬を捕つてゐる私が見える。川に行つて里の惡太郎と水を浴びてゐる私が見える。そこに蛇が泳いで此方へ向つてゐる。母親の涙が青白い頬を流れてゐるのが見える。東京の雜鬧の中に來て走つて行つてゐる私が見える。貧しい生活の中で嗚咽しながら本を讀んでゐる私が見える。五圓でも六圓でも好いから使つて呉れるところはないかと街頭をさがして歩いてゐる私が見える。自から傷けて蒼白い顔をしてゐる私が見える。妻を持つたり家を持つたりした私が見える。母の死に侍した私が見える。ある小説のヒロインと私と何か話してゐる。小石川の極樂水のところの阪が見える。工場のガラガラした氣分が浮んで來る。つゞいて旅に出で、海岸の磯のほとりを歩いてゐる私が見える。そしてかういふ姿は、もう自分ではなくなつて、他の境遇に生ひ立つた他の人間のやうに思はれる。自分の生活は別に何處かに隠れて残つてゐるやうにも思はれる……………。

夜遅く電車に乗つた。ふと氣が附くと、大勢の乗客の中にちらりとその顔が見えた。私ははつとした。

私は何うして好いかわからなかつた。胸の動悸が急に高くなつた。今のやうな冷靜な、廢墟のやうな心の状態にゐて、かういふ心の動搖を感じるといふことは餘程のことだと思つた。

先方の知らないのを利用して、いつそ次の停留場で下りて了はうかと思つた。しかしそれもしない中に次の停留場は過ぎて了つた。ふと立つたものがあつた。今まで私の前にゐた男は其處に腰をかけた。その顔はまともに私に面した。

『まア』

挨拶した女の顔は眞赤になつた。しかし私も女もその次の言葉を何う發して好いかわからなかつた。女はメリンスの單衣に黒がゝつた帶をしめて、頭を束髪にしてゐた。人をなつかしむやうな笑顔だけが残つてゐるばかりで、昔のはなやかな美しい肌も色彩ももうすっかり褪せ果てゐた。

『皆さん、御機嫌は?』

『難有う——』

また黙つて了つた。私達は何も言ふことが出来なかつた。

「今度逢つたら、今度逢つたら……、もう何を問ふ必要はない。一生に一度位はさういふ間柄になつても差支ない。愛したり、憎んだり、呪つたりした女だ。今度逢つたら、今度逢つたら」かう私は思つてゐた。しかしそんな空想が實現されたためしはなかつた。

考へると、大きな問題だつた。彼女に取つても、私自身に取つても……。ある學者はその爲めに湖水に投じて死んだが、それ以上に私達の運命は複雑した形を帯びてゐた。私達は生きたこの運命を堪へ忍

んだ。女の數奇な生涯は半ば私の與へたものであると共に、私の家庭の精神的破壊は、實にかの女がこれを促進したのであつた。かの女は私によつてかの女の自由を失ひ、私はかの女に由つて私の精神を擾亂させられた。今、猶私が女の殘骸を抱いて懊惱してゐるのは、皆なかの女の私に投げ與へた呪ひの爲めだ。それでゐて、この世では互に相觸れることの出来ないある約束が固く私達の間にあつた。

『弟さんは？』

『相變らず丈夫で』

『お國でも？』

『え、有難う——』

また沈黙した。女の胸を往來してゐる暴風は、矢張私の胸にも凄しい力を逞うしてゐた。私達は五分なり十分なりかうして相面して腰をかけてゐなければならぬ、ハメに陥つたことを、一種の神の裁判さばりのやうにすら思つた。

電車は走つてゐた。

灯はチラチラと色彩深く街を彩つてゐた。活動寫眞館からは今終結になつたと見えて、人がぞろぞろと出て來てゐた。右側には夜店の前をまた人が通つてゐた。

聞きたいと思ふことは非常にあつた。ひとりである時には、あれもさかう、これもさかうなどと想像した。かの女も矢張さうであつたらうと思ふ。

私は先きまで行つても好いのであるが、兎に角、其處で下りる決心をした。

『そこでお下りになるんですか?』

『え』

女はまた黙つて了つた。私は大きな問題の最後の尖端に立つてゐるのを感じた。これで、この問題は
お終である……。離れてまた近づきつゝあつた二つの物が、また永久に離れて行かうとしつゝある。電
車は私の下りる停車場へと次第に近づいて行つた。

『ぢや、左様なら……』

かう言つて挨拶して立上ると、女はふいと立つて、そして其處から下りるやうにした。
『此處から下りるんですか』

『え』

私は下りた。女も續いて下りた。月は明るく濠端の水を照してゐた。

本當にもう澤山だ。何も彼も澤山だ。自分は何處まで行つたからとて何うにもならない。刹那より他
に何もない。しかし刹那は現在ばかりでなくつて、過去も將來もまた刹那であることがある。長い長い
追憶もこれまた一刹那ではないか。

常に感激して、常に昂奮してゐなければならぬやうな氣がしてゐるけれど——否、否、つねに歡樂
に酔つてゐるのが眞の人生だといふやうな氣もするけれど、しかしもうそんなことは餘りに空想にすぎ
てゐる。澤山だ、澤山だ。

誰かが琴を弾いてゐる。その曲は何十年續いて弾かれたものである。これからまた何十年つゞいて弾かれるか知れないものである。琴の柱を外す音が高く何處かできこえた。

エランダの周圍は草花の鉢で一杯に圍まれてゐる。赤い白い黄い花が夜目にもそれを美しく見えた。丁度そこは街の角になつてゐるやうなところで、夜涼を趁ふ人がぞろ／＼と通る。電氣を蠟燭の代りにした提灯は赤く白く軒にチラチラと彩られてゐる。丁度歡樂のシンボルか何ぞのやうに……。

私達は其處で十年も前のことを話した。其處には種々な心があつた。世に向つて戦へるやうな神経もあれば、未來に向つて懂れるやうな情緒もあつた。ある人の顔は赤く、ある人の顔は蒼白く、ある人の顔は土のやうに暗かつた。人々は皆な自分を土臺にして、銘々勝手なことを饒舌つたり喚き散したりした。現代の批評や、外國の戦争の報道や、戀や、女や、酒や、さういふものが楽しく話題に上された。ある人の話した飛行將校の情死の話は、中でも際立つて人々の耳を聳たしめた。その將校は、女の襟首に拳銃を深く押し當て、殆ど筒先が肉に埋まるほど深く押し當て、引金を引いた爲めに、最初の一發も、次の一發も、廊下一つ隔てた向ふの室にきこえなかつたといふ。スツとも言はずに女は死んで了つた。そしてかへす力で、男は拳銃を自分の額にあてた。しかしその時は男はもう響に就いて注意を拂つてゐる餘裕はなかつた。忽ち凄しい音があたりを驚かした。

私達は空を飛ぶ人達の心理状態などを話した。人間が鳥のやうになるといふことは、今までの感覺に更に幾多の新しい感覺を加へずには置くまい。普通の心理では想像し理解することの出来ないある不可思議な心理が加はつて働いてゐるに相違ない。その心理は？ その空氣は？ こんなことを私達は想像

した。

男はその決意を實行する前に、女と一緒に海岸の丘の上に行つた。そこには觀音堂か何かがあつた。廣い青い海が未來派の繪のやうに其前に展けられてあつた。白い波頭、凄じい岩——其處で男は虚空に向つて一發最初の發射を試みて見た。その聲——靜かな漁村の晝の空氣を破つた其聲は、其時は唯不思議と思つて聞流した一漁夫の耳に再び蘇つて來た。漁夫は後にその時のことを話した。シオルシオとイボリタの戀などが再び私達の眼の前にあつた。

私はかうした話の中で、ある一つのシーンを想像した。それは小デユマの小説の中にあるシーンに似てゐた。女は熟睡してゐた。白い顔と白い肌着と白いきめの細かい綺麗な肌と。私はそれをじつと見詰めてゐる男を眼の前に見た。死、死にあらずんば、遂に遂にその女の心を全く自己のものにすることが出来ないことを考へた時、男は赫とした。男は帶を女の首に卷いた。女はそれをも知らずに、すやすやと熟睡してゐた。……恐ろしい考だ。私ははつとして空想から覺めた。彩あるエランタの軒の提灯はあゝ妖艶なロマンスを語るやうに靜かに夜風に搖いてゐた。

三冊の日記——一冊は青いクロースの表紙、一冊は小形のトルコ皮の表紙、一冊は半紙をそのまゝにとぢた手帳。數多い私の日記の手帳の中で、この三冊だけが今だに私の傍にあつた。

多い日記、本當に多い私の日記だ。それが残らず残つてゐたならば、さぞいろいろなことが思ひ出さるゝであらう。さぞさまざまの心理が研究されることであらう。大きな問題も其中には澤山にあつたで

あらう。しかし、多くは反古になつて了つたり、本箱の奥につかねられて了つたり、古本を賣る時にそれに雜つて何處かに行つて了つたりした。しかし、この三冊は、私には大切な日記帳だ。私は今日までそれを保存して來た。

トルコ皮の小形の手帳には、ある女に對する私の心理と、女の表情と態度、言葉から來る心理の錯綜したままとが線やら符號やら文字やらで現はされてゐた。もし、私が今にも死んで、この秘密な手帳が他人の手に落ちたならば、その人は屹度青い線や赤い線の無數に引いてあるのに驚くであらう。また何う考へて見てもわからない文字や文句の多いのに呆れて、そのまゝ無用の長物として無造作に反古の中に入れて了はるゝであらう。しかし私に取つては、これほど大切な手帳はなかつたのだ。これほど役立つた有益な手帳はなかつたのだ。

それは唯一年である。時には書かずに放つて置いた日もあれば、時には晴、雨としか書いてないやうな日もあつた。ある日には青と赤と黒との鉛筆で、直線と曲線が引いてあつたり、△や○が書いてあつたり、英語があつたりフランス語があつたりした。時にはサンスクリットなどさへ書いてあつた。

何んなに亂れた戀の潮であつたらう。また何んなに細かく解剖された戀の心であつたらう。女の言つた一言一句、女の見せた一笑一盼、さういふものから、私は細かい心の動き方を研究した。そこには慥惱もあれば、嫉妬もある。手鍊もあれば、まことの心もある。まことの心が手鍊に見えることもあれば手鍊がまことの心に見えることもある。しかも女の心理の行動は、皆な一定のリズムと波動とを持つてゐた。假令、それは女には無意識であつたにしても……。

私は簾椅子に身を横へて、長い間それをくり返して考へて見た時分のことを思ひ出す。あの時あゝ言つたぢやないか。この時、かう言つたぢやないか。私はかう言つて、いつも女を驚かした。

その時は何とも思はなかつたことが、後になつて重大な意味をつけて來ることなども澤山にあつた。堆積に堆積を重ねて、そして始めてまことの意味がわかつて來たことなども度々あつた。ある線には二重圈點がつけてあつた。あのフランス語には三角がつけてあつた。符牒でなければ言ひ現らはせないやうな感情や心理が到るところにあつた。

青いクロオス表紙の方は、それから比べると、年が餘程前であつた。少くともこの間に五六年は隔つてゐた。それを見ると、若い皮膚の肌理の細かい、なつかしい表情をする女がすぐ私の前に現はれて來た。線の代りに女の顔だの、唇だの、鼻だのが描いてあつた。若い感想めいたこともかなりに多く其處に見受けられた。ところどころに、女からよこした手紙が張つてあつた。それは紫インキで書いてあつた。

歌なども書いてあつた。

もう一冊の半紙でとびたものは、それよりもつと以前だ。不思議にもそれを見ると、一種特色のある聲を持つた汚ないお婆さんが第一に私の頭に浮んで來た。それから古い三間位の家が浮んで來た。最後に女の愁を含んださびしい顔が浮んで來た。

しかし、もう過ぎ去つた。其時々問題を起こしたことは今では、唯かうした小さな手帳となつて、私の机の上に残つてゐるばかりだ。オスワルドのやうに狂ひもせず、フオケライトのやうに死にもせず、

またはジョルジオのやうな残忍な最後も遂げずに、かうした平凡な一塊肉として此處に残つた。問題劇の主人公となるには、餘りに平凡な私の一生だ……。

私の眼には、川端の小さな廢墟が再びありと浮んで來つ。もう草も生えた。僅かに残つた礎もその縁の中に名残なく没却されて了つた。會て其處に小さな停車場があり、小さな休憩所があり、小さな悲劇があり、小さな繁華があつたとは、誰も知るものもなければ、誰も氣が附くものもない。赤い煉瓦もやがては長い年月の風雨に曝されて全く土に歸して了ふであらう。其處に熱い心の一生を費した人間があつたなどとは誰も知るものもなくなつて了ふであらう。百性が笠をかぶつて雨のそぼふる中を通つて行くだらう。雲雀が野から空に得意の歌を囀つて揚つて行くだらう。

しかし、ロオマや奈良やフルージのやうに、假令好奇の旅客を惹くことはないであらうとも、その一時の榮えを見た人の中には、靜かにその址を歩いて見たいと思ふものもないではなからう。

何も彼も過ぎ去つた。完全な小さな廢墟だ。

